

### 三 六道輪廻の現在生活

「闇の夜に鳴かぬ鴉の聲きけば、生れぬ先の我ぞ戀しき」。禪家では、父母未生以前の我を見よと申します。父母が生ぬ前の私を見よと云ふのです。闇の夜の眞暗の中に、眞黒の鴉を見付けて、而も鳴かぬ聲を聞けと云ふ。随分難問題である。甚だ六ヶ敷い教のやうでありますが、つまり總ての概念を捨て、あらゆる約束を離れて、赤裸々の自己を見よと云ふのでありませう。和尚さんは弟子に向つて、その未生以前の我は、斯うもあらうかなど、教へては下さいませぬ。この教へて下さらぬ所に味があるのです。概念を離れ豫想を離れて、本眞劍の自己になつて、我と我が赤裸々の風光に接する、茲に眞實の宗教の第一歩がある。親鸞聖人が「定水を凝らすと雖も、識浪しきりに動き、心月を觀ずと雖も、妄雲なほ覆ふ」との自覺も、善導大師が「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より以來、常に没み常に流轉して、出離の縁あることなし」と自覺し、御自身をば、無人空迥の澤の、淋しい旅人に譬られたのも、全く一切を捨て離れた時の自覺に外なりません。

斯うして唯一人になつた時、私共は我心の常に動きづめであることを認めるのである。何か事に當つて狂奔する時、心は燃え上り燃え上つて、八熱地獄の炎に包まるゝ如く、一朝當が脱れて儘ならぬ世を歎つ時、淋しくて、八寒地獄の氷の中に閉されたやうになる。八寒八熱の氷や炎に攻められて、暗黒のどん底に沈み苦しむかと見れば、忽ちにして貪欲の餓鬼となり忽ちにして肉樂の畜生となり、俄に瞋恚の修羅となります。さうかと思ふと修養だの人格だのと、立派な道に心掛のある人間様に立還つて、萬物の靈長と云つた事に氣を高ぶらせます。とすると、花に酔ふた胡蝶のやうに、浪に飛ぶ千鳥のやうに、たゞもう何も彼も打ち忘れて、恍惚とした天上界の平安に

住ぢゆうすることもありません。而しかして此等これらが、ほんの暫しばらくの間であつて、束つかの間に  
轉ころがり移うつり變かはり、時々刻々じじこくくせつな利けん那ぜん々々の現前げんぜんに、現實げんじつの六道輪廻だうりうんねをやつて居あるの  
です。

此この輪廻りんねの裡うちに常没常流轉じやうもつじやうるてんの心こころは、浮ういたり、沈しづんだり、喜よろこんだり、悲かなし  
んだり、跳はねたり、躍をどつたり、勇氣ゆうきを出だしたり、沈鬱ちんうつに入いつたり、ほんの暫しばらく  
くに移うつり行ゆく心こころを眺ながめては、流石さすがの私わたくしも戰慄ぞつとせざるを得えない。身みに寒氣さむけ  
覺おぼえて肌はだに粟あはを生しやうずる程ほどである。而しかして此間このかん、絶たえず巧妙こうめうに機敏きびんに働はたらき廻まは  
つて居あるのは、貪欲むさぼりの爪つめ、瞋恚いかりの眼め、愚痴ぐちの溜息ためいきであります。是これが爲ために束縛そくばくせ  
られて、首くびも廻まはらぬまでに苦くるしめられて居ある。

吾々人間われくにんげんが罪つみを犯をかしたならば、鐵鎖てつさを以もつて繋つながれるのを、轉輪王てんりんわうの王子わうじが  
王わうに罪つみを犯をかした場合ばあひには、金鎖こんさを以もつて繋つないで、七寶しつぽうの牢獄らうごくに投なげられると、  
釋尊しやくそんは説とかせられてあります。成程なるほど、私共わたくしどもも手てに鐵鎖てつさはないが、無形むけいの金鎖こんさ  
に繋つながれ居あはすまいか。同おなじ繋つながれるならば金きんの方がよいと云いふか、それは  
鎖くわいに目めをかけて居あるのである。人生じんせいに囚とらはれてはならぬ。世間せけんに没頭ぼつとうして  
はならぬ。主人公しゆじんこう、主人公しゆじんこう。惺惺せいせい着やく。他時異日たじいじつ、人ひとの瞞だまかを受うくる莫なれ。お内うちか  
な、お内うちかな。主人しゆじんが留守るすではなりません。確しつり主人しゆじんを捉とらへて逃にがさぬ様やう  
にし、本間ほんまの自己じこを凝視みつめなさい。そこに三毒どくの激はげしい跳梁てうれうを發見はつけんするであり  
ませう。